

浅田次郎『一路』を 社会経済史の目で読む

—参勤道中小説の愉しみ—

勝 矢 倫 生

1 はじめに

昨年の夏、コロナ禍の鬱々とした日々には倦み疲れて、久しぶりに浅田次郎氏の長編時代小説『一路』上下2巻を読み返してみようと思い立ちました。持ち合わせの単行本の奥付をみると、なんと上下とも初版本、2013年2月25日初版発行となっています。そうか、あれからもう8年も過ぎたのか、ストーリーの面白さに魅了され、著者が繰り出すあの手この手の巧みな筆致に心躍らせた記憶が懐かしく甦ってきました。ページを繰るごとに改めて『一路』の時代小説としての完成度の高さと面白さを再確認しました。

本稿は本誌10号に掲載された拙稿「藤沢周平『蟬しぐれ』を経済の目で読む」に続く、時代小説を社会経済史の視点から読み解く試みの続編です。拙い内容ですが、既読の方はもう一度、未読の方はこれから、傑作時代小説『一路』を手にとって頂く刺激剤の役割を果たせれば幸いです。

2 身分社会に生きる武士

参勤交代をする旗本

失火（実は御家の転覆を謀る蒔坂将監一味の策謀）で父を失った算え年19歳の青年・小野寺一路は急遽跡目を継いで道中供頭となり、参勤道中の差配に当たるように命じられます。『一路』は、文久元年（1861）12月、この若き青年供頭の差配の下、旗本・蒔坂左京大夫一行が西美濃田名部（架空の地

名)から中山道を踏破し、幾多の艱難辛苦を乗り越え、無事江戸入りを果たす物語です。

参勤道中とは何でしょうか。参勤交代について、皆さんはよくご存じだと思いますが、念のため手元の2つの日本史辞典の「参勤交代」の記事をみてみましょう。

江戸時代、諸大名が一定の時期を限って江戸に伺候することを参勤と言ひ、交代の期になって封地に就くこととの総称。参観交替とも書く¹⁾。
(下略)

参観交代とも。江戸時代、大名が一定期間江戸に出仕することを参勤といい、交代とは領地に就くことをいう²⁾。(下略)

参勤道中とは大名が将軍に拝謁するため江戸に向かう旅のことだとわかりますね。では、なぜどちらの辞典も「参勤」、あるいは「交代」を行なう対象として大名だけを挙げ、旗本に触れていないのでしょうか。それは参勤交代を行なわなければならない、あるいは参勤交代が許されている旗本の数は無視しても差し支えないほど少数だったからです。

『一路』の冒頭、「其の壺 御発駕まで」で旗本・蒔坂左京大夫の身分が詳しく述べられています。少し長文になりますが、そのまま引用します。

西美濃田名部を領分とする蒔坂左京大夫は大名ではない。知行七千五百石の旗本である。参勤交代は大名の務めだが、旗本の中には知行地に陣屋を構えて在国する者がおり、その実態は大名同然であることから参勤の義務を負った。

いわゆる交代寄合と称する旗本である。寄合とは元来、無役だが禄高も格式も高い旗本を他と格別した世襲の制であり、そのうちの参勤交代をする者が交代寄合である。

¹⁾ 丸山雍成「参勤交代」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第6巻 吉川弘文館 昭和60年)所収 522頁。

²⁾ 日本史広辞典編集委員会編『日本史小辞典』改訂新版 山川出版社 平成28年408頁。

万石格の大名ではないが立場は大名並、旗本ではあるが一般の旗本とは明らかに分限がちがう。よって幕府から賜った知行地であっても、大名と同様に領分、すなわち、わが国とする。また、旗本が若年寄支配に属するのに対し、老中支配とされている点も大名並であった³⁾。

これを理解するのはなかなか大変です。順を追って徳川時代の武家社会の仕組みをみていきましょう。徳川期、武士は支配階級として、天皇・公家・僧侶・神官などを除けば、他の身分の者を圧倒する統制力を保持していました。しかし、武士身分のなかにも明確な上下の階層序列がありました。武士の身分は将軍・大名・旗本・御家人・陪臣・武家奉公人などに大別できますが、それぞれに領知（地）石高・知行高・家禄などの経済力の差異、将軍との親疎、江戸城における殿席などを基準にして明確なランクが定められていました。

図 1

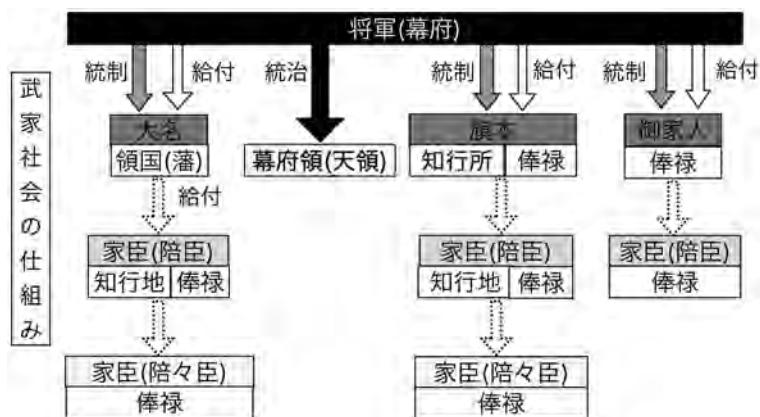


図1は徳川期の武士の支配関係を図示したものです。将軍からみて直属の家臣（直臣・じきしん）は大名・旗本・御家人です。そのうち大名を除く旗本と御家人は直参（じきさん）と呼ばれました。

将軍は大名に領地・領国を給付し、一定の統制を加えながら大名にその支配を委ねていました。大名が治める領地・領国は徳川後期には藩と呼ばれる

³⁾ 浅田次郎『一路（上）』中央公論新社 平成25年 10頁、中公文庫（上）平成27年 12～13頁。

ようになりました。

一方、将軍は全国各地に幕府直轄領（天領）を保持し、代官所を置いて郡代・代官に統監させ、都市と特別地域は遠国奉行に統治させました。

旗本と御家人の差異は将軍に謁見（御目見得）できるかどうかだということとはご存じだと思います。寛政年間（1789～1802）、約 5200 人の旗本がおり、正徳年間（1711～16）に約 17240 人の御家人がいたことが知られていますが⁴⁾、大名・旗本研究者の小川恭一氏は、幕府が瓦解した慶応 4 年（1868）前後の旗本 6797 人、御家人 26000 人という数値を紹介されています。同氏は、徳川末期、旗本・御家人の数は急速に増加したが、この数値は当主と部屋住みの役職者を加えたものと述べています⁵⁾。

旗本は将軍から領地（采地・知行地、旗本領に限って知行所と言われました）を給付された知行取と俸禄米を給付される禄米取に大別できます。禄米取の旗本は幕府が天領の村々から徴収した年貢米のなかから年々一定量の米を受給しました。蔵米取は切米取・現米取・扶持米取の区別がありましたが、ここでは触れません。御家人はほとんどの者が蔵米取で知行取の数は限られていました。知行取の御家人は幕末にはほとんど姿を消したので、図 1 には組み入れていません。

大名・旗本・御家人にもそれぞれ直属の家臣がいます。知行地を給付される上級家臣もいれば、俸禄を給与される中・下級の家臣もいます。将軍からみれば、彼らは自分の直接の家臣である大名・旗本・御家人の家臣、つまり陪臣です。その陪臣が家臣を持てば彼らは陪々臣ということになります。

俗に「家来の家来は家来ではない」とか、「臣下の臣下は臣下にあらず」と言われるように、幕府は陪臣について、それぞれの主人に支配を委ねる建て前をとりました。しかし、まったく干渉しなかったわけではなく、陪臣の道中の身だしなみ、江戸留守居役の奢侈・遊興を統制する法令を再三発令しました。陪臣が江戸で犯した犯罪は幕府の奉行所で吟味され、刑の執行は主人が行なうこととされていました。徳川前期、幕府は大名の家臣間の紛争、いわゆる御家騒動に強く干渉し、多数の藩が改易（取り潰し）の対象になりましたが、後期になると、藩政改革や財政改革を契機に家中騒動が頻発・増

⁴⁾ 深井雅海「旗本・御家人」（前掲『国史大辞典』第 11 巻 平成 2 年）所収 582～3 頁。

⁵⁾ 小川恭一『江戸の旗本事典』角川ソフィア文庫 平成 28 年 50～51 頁。

加したのにも拘わらず、ほとんど幕府の干渉はみられなくなりました⁶⁾。後にみるように、将軍（幕府）からみた家臣の位置づけ・序列の問題は小説『一路』が穏やかな終幕を迎える上で大きな役割を果たします。

小説『一路』の第二の主人公とも言うべき旗本蒔坂左京大夫は幕府直参の家臣で西美濃田名部に石高7千5百石の領地（采地＝知行所）を給付（安堵）された知行取です。すでに記した通り、著者は左京大夫の身分を「いわゆる交代寄合と称する旗本である。」と紹介しています。交代寄合とは一体何でしょうか。

旗本は軍事をつかさどる番方と行政を担当する役方に分かれて幕府の役職を担当しましたが、無役の旗本は寄合組に編入されました。交代寄合（こうたいよりあい）とは、知行高1万石未満、本来無役で、参勤交代が許されている旗本を言います。参勤交代が可能な、寄合組に所属する旗本という意味です。旗本の大多数は若年寄支配ですが、交代寄合と高家は老中支配となっていました。

江戸城本丸御殿

著者の旗本・蒔坂左京大夫の身分の紹介はまだ続きます。

江戸にあつて登城する折にも、大名と伍して帝鑑間や柳間に詰める。同じく格式の高い表高家を除けば、これらの席に詰める旗本はいない。まさに幕府直臣中の別格が、この交代寄合であつた。

いずれにせよ元和偃武以来、二百五十余年もの太平が続けば、屋上に屋を架すような制度が積もりかさんでわけがわからぬ。この交代寄合にしたところで、別格と呼ぶにはいささか多すぎる三十三家を数えるという。よってこの三十三家をさらに格付けするという必要から、石高もしくは格式の高い二十家に、「表御礼衆」という名誉が与えられた。蒔坂左京大夫はこの家格である⁷⁾。

⁶⁾ 服藤弘司「陪臣」（前掲『国史大辞典』第11巻 平成2年）所収 460頁、北島政元「御家騒動」（同第2巻）昭和55年）所収 435～6頁。

⁷⁾ 浅田次郎 前掲『一路（上）』10～11頁、文庫上 13頁。なお、文中の「表高家」は「奥高家」の誤り。「表高家」は非職の高家、在職の高家は「奥高家」と呼ばれました。〈福井那佳子「高家」（大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館 平成22年）所収 192頁〉

大名・旗本は江戸に在府中、定期的に将軍に拝謁するとともに、定められた慶事の日には江戸城に登城することが義務づけられていました。もちろん、参勤道中を終え、無事に江戸入りを果たした時も、その報告のために登城しなければなりません。

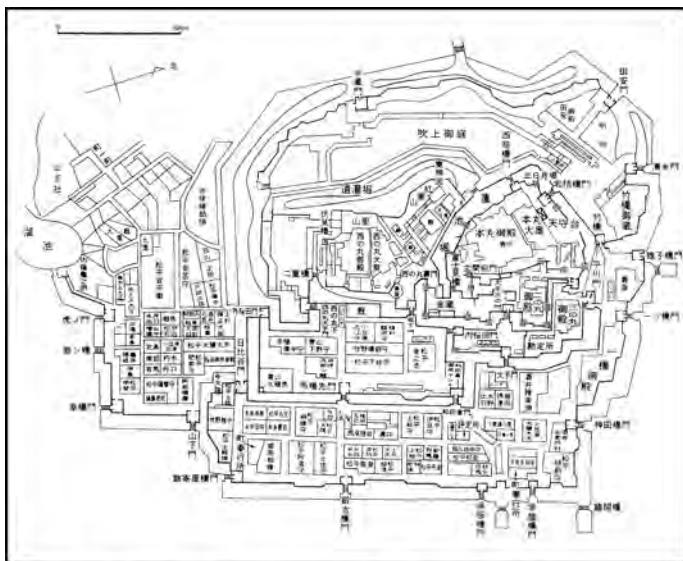
大名・旗本が将軍に拝謁するまで待つ間、控える部屋を殿席（伺候席）と言い、将軍に御目見得する場所を礼席と言いました。拝謁する部屋である礼席はもちろん、控室である殿席も大名・旗本のそれぞれの家格に応じて厳しく区別されていたのです。

殿席のランクは、①大廊下、②溜之間、③大広間、④帝鑑之間、⑤雁之間、⑥菊之間、⑦柳之間の順です。他に江戸町奉行や勘定奉行などが詰める芙蓉之間がありました。詳しくは図 2A・B と表 1A～D を参照してください。大名・旗本たちは、登城後、それぞれ所定の殿席に詰めて儀式的開始を待ちました。続いて行事ごとに定められた礼席に入り、将軍に御目見得したのです。

『一路』の殿様・蒔坂左京大夫の殿席は帝鑑之間ですから、礼席は大広間か白書院です（表 1C）。白書院が礼席となるのは月次（つきなみ）御礼の時だけですが、毎

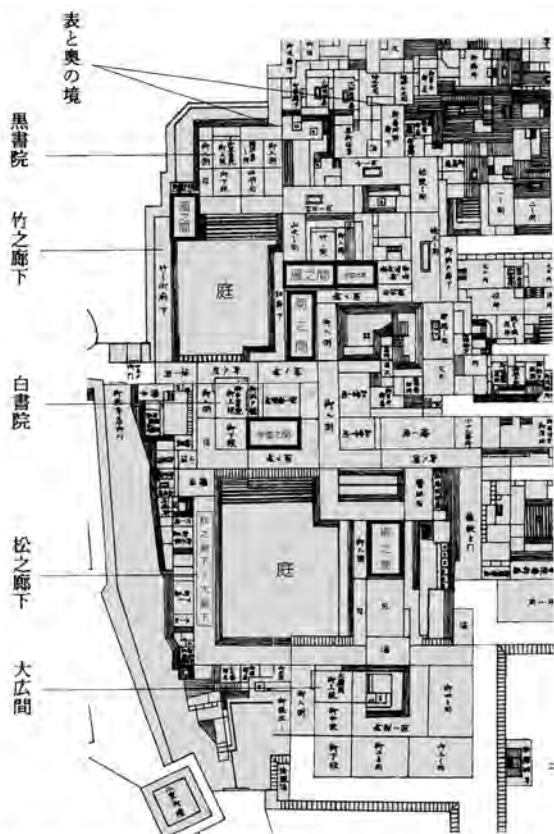
月 1 日・15 日・28 日に行なわれるので、年間最も回数が多く、将軍に御目見得する場所はほとんど白書院ということになります。ただし、表 1D に注記したように、厳密に言うと、月次御礼は正月 1 日、8 月 1 日、3 月 1 日、6

図 2A 江戸城周辺図 寛政 12 年（1800）頃



村井益男『江戸城 将軍家の生活』中公新書 昭和39年 の付図を転載

図 2B 江戸城本丸御殿（部分）



深井雅海『江戸城一本丸御殿と幕府政治』中公新書 平成20年
19頁図3を改変

月15日は行なわれず、
7月15日も行なわれ
ませんでした。

さて、著者は殿席を
帝鑑之間・柳之間に占
める交代寄合は旗本
の中で別格の家柄で
あるが、それでも33
家もある。それをさら
に格付けするために
20家の表御礼衆が設
定されたのだと述べ
ています。交代寄合の
総数は34家で幕末に
33家になったとする
説がありますが、ほか
は主旨本当の事です。
もちろん架空の蒔坂
家はその数に含まれ
ていませんが・・・。

交代寄合は表御礼
衆、四衆、その他の2
家という3つのラン

クに区分されていました。表御礼衆20家（菅沼・久松松平・竹谷松平・榊原・
本堂・生駒・山名・池田松平・戸川・竹中・溝口・朽木・平野・木下・山崎・
最上・近藤・金森・後藤・伊東）は表御殿で将軍に拝謁し、大番頭や御側頭
など幕府の要職に就任できました。各家の故事来歴を記す余裕がありません
が、大名家から減封を受け旗本となった家や、中世以来の名門家、徳川家と
深い縁故を持つ家が並んでいます⁸⁾。竹中家はあの軍師・竹中重治（竹中半兵

⁸⁾ 田原昇「交代寄合」（竹内誠編『徳川幕府事典』東京堂出版 平成15年）所収 54
～5頁。

表 1A 江戸城本丸御殿の殿席

殿席			
序列	部屋	場所・間取り・広さなど	対象者
1	大廊下 (おおろうか)	松の廊下に西隣 上之部屋(14 畳)と下之部屋 (22 畳)で構成。	上之部屋は御三家、下之部屋 はそれ以外の大名、総数は安 永 2 年(1773)の 6 家から天保 10 年(1839)には 10 家に増加、 将軍ゆかりの大名のための特 別席。
2	溜之間 (たまりのま)	竹の廊下の東隣の部屋。黒書 院の一部。礼席としても用い られた。	井伊家・会津松平家・高松松平 家などの有力譜代大名
3	大広間 (おおひろま)	上段・中段・下段・二之間・ 三之間・四之間などで構成、 広さは 500 畳ほど。大広間 は礼席としても用いられた。	家門、外様大名の四位以上、30 家程度。
4	帝鑑之間 (ていかんのま)	連歌之間の南隣、白書院の一 部。 礼席としても用いられた。	古来から譜代であった 10 万 石から 1 万石までの大名 60 家 ほど。交代寄合の一部。
5	雁之間 (かりのま)	菊之間の北隣。	城郭を保持した 1 万石から 30 万石までの大名 40 家ほど。高 家の殿席
6	菊之間 (きくのみ)	雁之間の南隣。	城郭を所持していない 1 万石 から 3 万石の大名 30 家ほど。
7	柳之間 (やなぎのみ)	医師溜の南西側。	官位が五位の 1 万から 10 万 石の大名 80 家ほど。交代寄合 の一部。
◎	芙蓉之間 (ふようのみ)	雁之間の東隣。	奏者番・寺社奉行・大目付・町 奉行・勘定奉行・作事奉行・普 請奉行などの幕府役人就任 時。

大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館 平成 21 年、第 3 部「江戸城編」449～550 頁の
「大廊下」・「溜之間」ほか諸項目の参照によって作成

衛)の子孫です。

四衆とは那須衆 4 家(那須・福原・芦野・大田原)、美濃衆 3 家(高木〈西・東・北〉)、信濃衆 3 家(知久・小笠原・座光寺)、三河衆 2 家(松平・中島)の総称です。表御礼衆と異なり、将軍とは畳廊下で通りがかりの御目見得しかできなかったため、表御礼衆と対比して「御勝手御礼衆」と呼ばれました。那須衆 4 家は隔年参府、他は何年かに 1 度しか参府できませんでした。四衆

表 1B 江戸城本丸御殿の礼席

礼席		
部屋	間取り・広さなど	
大広間	表 2A に同じ。	大広間は殿席としても用いられた。
黒書院(くろしょいん)	上段・下段・囲炉裏之間・西湖の間・溜之間などで構成、縁類(縁側)を含めると 190 畳ほど。	溜之間は殿席としても用いられた。
白書院(しろしょいん)	上段・下段・帝鑑之間・連歌間などで構成、縁類(縁側)を含めると 300 畳ほど。	帝鑑之間は殿席としても用いられた。

同上

表 1C 江戸城本丸御殿の殿席から礼席への移動

殿席	礼席			
	年始御礼	八朔御礼	五節句御礼	月次御礼
大廊下	白書院	白書院	白書院	黒書院
溜之間	白書院	白書院	白書院	黒書院
大広間	大広間	大広間	大広間	白書院
帝鑑之間	大広間	大広間	大広間	白書院
柳之間	大広間	大広間	大広間	白書院
雁之間	大広間	帝鑑之間	帝鑑之間	西湖之間縁類
菊之間	大広間		帝鑑之間	人形の部屋は雁之間

深井雅海「礼席」(竹内誠編『徳川幕府事典』東京堂出版 平成 15 年) 所収 78 頁の表 1 を改変

表 1D 大名・旗本の登城日

年始御礼		1月1日～3日	❖年始 元旦の御三家・加賀前田家・越前松平家・井伊家などに始まり、3日の無位無官の大名・寄合、500石以上の無役の旗本まで、ほぼランク順の日程 ❖八朔 天正18年(1590)、豊臣秀吉によって関東に移された徳川家康は江戸城を居城とした。同年8月1日に入城したことに因み祝賀が行なわれた。 ❖月次御礼 1月1日は年始、8月1日は八朔に重なるため、3月1日は上巳に、6月日は嘉祥に近いに行なわれなかった。また7月15日も行なわれなかった。
八朔御礼		8月1日	
五節句御礼	若菜(人日)	1月7日	
	上巳	3月3日	
	端午	5月5日	
	七夕	7月7日	
月次御礼		毎月1・15・28日	

大石学編 前掲『江戸幕府大事典』第5部「基本用語編」829～1005頁の「八朔」「月次御礼」ほか諸事項の参照によって作成

で幕府の役職に就く者はほとんどいませんでした⁹⁾。

この四衆に準じる扱いを受けたのは岩松・米良の2家です。岩松家は新田

⁹⁾ 小川恭一 前掲『江戸の旗本事典』65 頁。

義貞の後裔で上野国に所領 120 石を安堵され、毎年正月 3 日に御勝手御目見得だけに参府しました。米良家は南朝の忠臣菊池氏の末裔で肥後国米良山中に広大な領地を得ました。米がとれないので無高 5000 石の格式を持ち、家督相続ごとに江戸に参府して将軍に拝謁するのを慣例としていました。その他、下野国の喜連川家や蝦夷松前家のように交代寄合から大名に昇格した家がありますが、ここでは触れません¹⁰⁾。

礼服

江戸城における将軍拝謁の際、大名・旗本の家格の差異が明確に表われる場はまだあります。

江戸城での儀式の際、大名・旗本たちはそれぞれの官位に応じた衣服を着用しなければなりません。御三家を除く大名では加賀前田家は宰相(参議)にまで官位を上げ、彦根井伊家など 5 家が中将、越前松平家など 10 数家が少将に昇進しましたが、侍従・四品(しほん 従四位下)になる大名でさえ数が限られ、大多数の大名はせいぜい諸大夫(従五位下)止まりでした。

旗本には侍従・諸大夫・布衣(ほい)・御目見得の序列がありました。侍従・諸大夫は大名と同じ官位であり、特に侍従は幕府と朝廷間の儀礼を司る高家にのみ許される官位で、世襲されました。諸大夫は大番頭、書院番頭、小姓組番頭、江戸・京都・大坂町奉行などの役職に就いた場合、この大名並みの格式が与えられました。

布衣は六位相当の官位を意味しますが、朝廷への執奏なく将軍から任じられる武家独自の官位でし

図 3 礼服図



松尾美恵子・藤實久美子編『大名の江戸暮らし事典』
椋風舎 令和3年 213頁図1を転載

¹⁰⁾ 田原昇 同上、小川恭一 同上書 66～7 頁。

た。書院番組頭、小姓組番組頭、駿府町奉行・佐渡奉行などに着任した場合、この官位が与えられました。布衣というのは衣装の名称です。布衣の官位が与えられると礼式日に布衣の着用が認められます。

もう一度旗本の礼服を上位からみていくと、侍従以上は直垂（ひたたれ）、四品は狩衣、諸大夫は大紋、そして布衣は布衣、単なる御目見得格の旗本は素襖（素袍・すおう）が基本の礼服でした。大礼服と言って將軍宣下や重大な法事の際には五位以上の旗本は衣冠束帯を身につけました¹¹⁾。

小説『一路』の蒔坂左京大夫はどの礼服を身に着けていたか。交代寄合は幕府の役職に就かない限り官位はなく、左京大夫は無役ですから無官です。しかし、蒔坂家は交代寄合筆頭の由緒ある家柄であり、まさか素袍のはずはありません。著者は物語の終盤、左京大夫が若き將軍・徳川家茂に謁見する場面です。ようやく礼服のことに触れています。左京大夫は幼くして蒔坂家の家督を襲名して、帝鑑之間に詰めたときの心細さを切々と將軍に語ります。

左京大夫は九歳にて蒔坂家の跡を襲い申しました。世の中の右も左もわからぬまま、大紋の直垂を無理強いに着せられ、供もなく帝鑑間に着席させられた折の心細さは、今も夢に現われます¹²⁾。

江戸城本丸御殿、御殿と言うからには華やかな世界を想像しがちです。たしかにそこでは様々な儀式が日々賑々しく執り行なわれました。しかし、儀式の場は武家社会の身分秩序の確認の場でもありました。大名・旗本たちは殿席・礼席で自家の家格を体感させられた上、礼服による視覚化によって他家との家格の差異をまざまざと見せつけられたのです。

¹¹⁾ 杉田善雄『將軍権力の確立 日本近世の歴史2』吉川弘文館 平成24年 244～8頁。詳しくは、小川恭一 前掲『江戸の旗本事典』253～8頁を参照して下さい。

¹²⁾ 浅田次郎『一路（下）』中央公論新社 平成25年 318頁、中公文庫下 355頁。実は蒔坂左京大夫という名そのものから、礼服が大紋であることを知ることができます。諸大夫は従五位下という位階に叙せられた者で、あわせて律令官職に任ぜられ、この官職を通称（名前）のごとく使用する。この通称としている官職は、格が上昇しても基本的に変える必要がない。」〈上野秀治「武家の官位」(前掲『徳川幕府事典』) 所収 201～2頁) とある通り、左京大夫と名乗る限り、たとえ無官であっても蒔坂左京大夫の位階は諸大夫に相当するため、礼服は大紋であることは明らかです。

江戸城本丸御殿、そこは武家家格社会の縮図でした。家格の差異はその他にも将軍への献上品・下賜品の差別、登城時の供の数、駕籠・傘の拵えなど数限りなくあり、それらは大名・旗本たちの日常の序列に直接反映しました。

左京大夫は単に作法がわからなかったから心細かったのではありますまい。繊細な左京大夫は優越感や劣等感、妬みや蔑みが渦巻く殿中の大名・旗本たちの意識を子供なりに鋭敏に感じ取っていたはずです。しかし、苦しみ以外の何ものでもなかったはずの殿中での気苦労は左京大夫を一廉の旗本に成長させる役割を果たしました。著者は物語の進行とともに、「うつけ」のふりをしながら、しっかり人を見きわめ、上下の隔てなく等しく人を愛する心優しい旗本に成長を遂げた蒔坂左京大夫の姿を生き生きと描き出していきます。

3 御発駕の前に

「元和辛酉歳蒔坂左京大夫様行軍録」

主人公・小野寺一路は、父の急死にともない、その跡を継いで参勤道中の供頭を勤めるように命じられます。急遽故郷の西美濃田名部に戻った一路は叔父の家を訪ねて助力を請うたものの、にべもなく断わられます。物語はそこからゆっくりと動き出します。田名部の陣屋に呼び出された一路は国家老由比帯刀、御家門の蒔坂将監の同席の下、殿様・蒔坂左京大夫から正式に道中供頭に命じられます。

まだ若く働き盛りだった父から道中供頭の役務について何も教わっていなかった一路は、途方に暮れたまま、父が住んでいた武家屋敷の焼け跡を訪れます。そこで下男の手平が見つけたものは焼け残りの文箱でした。そこに入っていた古ぼけた小冊「元和辛酉歳蒔坂左京大夫様行軍録」、これこそ、行き詰まった一路の前途を開くかけがえのない宝物でした¹³⁾。

一路は思い悩みます。「行軍録」は「参勤道心得」であり、先祖からの有り難い贈り物だ。しかし、「元和辛酉歳」とは元和7年(1621)のこと、文久元年(1861)の今から見れば240年も前の手引書だ。冒頭の「参勤交代之御行列ハ行軍也」という表現は大坂の陣から6年後のまだ太平の世が到来

¹³⁾ 浅田次郎 前掲『一路(上)』18～23頁、文庫上 22～7頁。

していなかった時代の表現であり、今の時代にそぐわない。授かった「行軍録」はこの度の参勤道中に役に立つのだろうか¹⁴⁾。

一路の迷いを正してくれたのは彼が投宿していた場末の旅籠「麴屋」の相客、道中笠の臙庵でした。物語の終幕間際に正体が明かされるのですが、実は臙庵は將軍・徳川家茂の御庭番（隠密）で、易者に姿を変えて、蒔坂家の動静を探っていたのです。

彼は言います。200年や300年で物事はそう変わるわけではない。今も征夷大將軍に任じられた將軍の采配に諸大名は従わねばならない。だとすれば、1年に1度ぐらいは自軍を率いて出府するのが勤めだろう。諸大名が隔年で交代すれば、江戸に常に半数の大將と軍兵がいるわけだから、天下は泰平、参勤交代の行列は行軍に他ならない。「行軍録」に書かれていることは決して無意味ではない。横着のなせる業で長い間に随分変わってしまったあれこれを手本通りに甦らせるのも一興ではないか¹⁵⁾。

さあ、ここからは悲喜こもごも、躍動感溢れるストーリーが展開します。臙庵の言葉に意を強くした一路は行軍録に則った参勤行列を実現するために準備を開始するのです。

まず、行軍録にある「先達ハ東照権現様御賜之朱槍二筋」です。八幡社に詣でた一路は嫌がる神主を脅し騙して社殿奥に木箱に入れて秘蔵されていた大朱槍2本を手に入れます。参勤行列で長さ1丈余り（3m余り）、重さ5貫目余り（20kg弱）の大槍2本を誰が持ち運ぶのか、茶店で昼食代わりのうどんを食べていたところに、丁太と半次という双子の博労がやって来ます。2人とも身長6尺（180cm）余り、目方は25貫目（100kg）ほどもある巨漢です。槍を持たせたところ、2人とも軽々と持ち上げ、地面に立てなくても持ち続けられると言います。一路は迷うことなく2人を行列の槍持に雇い入れます。その後、2人との縁で彼らの持ち馬「ブチ」が探し求めていたお殿様の替え馬として道中を共にすることになります¹⁶⁾。

参勤道中で専属の髪結いを務めてくれる髪結い新三、一路が迂闊にも失念していた参勤道中の宿割の手配を済ませてくれていた浄願禅寺住職の空澄、

¹⁴⁾ 同上『一路（上）』28～31頁、文庫上 32～6頁。

¹⁵⁾ 同上『一路（上）』38～42頁、文庫上 43～8頁。

¹⁶⁾ 同上『一路（上）』43～61・114～9頁 文庫上 48～69・127～31頁。

まだこの時は2人とも真相は知らないのですが、一路の父・弥九郎と同様に、蒔坂将監一味に父を謀殺された供頭添役の息子・栗山真吾、派手々々しい鉦叩きの陣笠をかぶり、猩々緋の陣羽織を身につけ、片鎌十文字槍を携えて参勤道中の先手を勤めることを引き受けてくれた佐久間勘十郎など、参勤道中で一路を支援してくれる人々との出会いが続きます¹⁷⁾。

一路のために自分で仕立てた羽織袴を携えて場末の旅籠「麴屋」を訪ねてくれた一路の許嫁・薫、通例の賄い料50両、勘定方の裏金から30両、そこに自分の持ち金20両を加え、100両もの参勤道中費用を渡してくれた薫の父・勘定役の国分七左衛門、郷里に戻って以後、田名部の人々に背を向けられ続けてきた一路は力強い心の支えを得ます¹⁸⁾。別れ際に七左衛門が信頼を込めて一路に語りかけた言葉が泣かせます。

他人の家の前で長々と頭を垂れ、あまつさえ童のごとく泣き出す馬鹿があるか。家内にまで貰い泣きをされたのでは、亭主のわしが骨を折らぬわけにはゆくまい。このうつけ者めが¹⁹⁾。

御発駕に備えて必死に頑張る一路の前に多数の協力者が現われます。著者は、敵対者や傍観者を次々仲間に誘い入れ、何としても目的を果たそうとする一路の一途な生き様を躍動感溢れる筆致で綴っていきます。協力者となる人々の個性を、時には面白おかしく、時には深刻に、実に生き生きと描いています。茶店の婆さんや神主さんが喋る関西弁も愉快です。西美濃田名部は近江国彦根藩の隣領だということはずっと後に明かされます。架空の地・田名部は美濃国ですが、関西圏の端っこなのです。実に読ませる時代小説作家です。著者の力量に舌を巻くほかありません。

参勤交代

蒔坂左京大夫一行が参勤道中に旅立つ前に、参勤交代についてももう少し学びましょう。旗本の参勤交代については前章である程度触れたので、ここでは主に大名の参勤交代について述べることにします。

¹⁷⁾ 同上『一路（上）』81～109頁 文庫上 90～121頁。

¹⁸⁾ 同上『一路（上）』68～80頁 文庫上 77～90頁。

¹⁹⁾ 同上『一路（上）』80頁 文庫上 90頁。

徳川幕府による参勤交代制度は寛永 12 年（1635）に発布された「武家諸法度」によって確立しましたが、この時の規定は簡単なもので、その後様々な改訂を経て次第に体制が固まっていきました。

諸大名を交代時期と江戸在府期間によって分類すれば、外様大名は江戸在府 1 年の 4 月交代、親藩・譜代大名は 6 月交代を原則にしていました。大名の領地所在地を考慮して、参府（表）と帰国（裏）を組み合わせ、街道の混雑と領地の所在地の偏りを避ける工夫が取り入れられていました。関東の大名は半年交代が原則で、8 月参府・2 月帰国、2 月参府・8 月帰国の 2 類がありました。他に長崎の警護に当たる佐賀・福岡藩などは 2 年に 1 度の参府、在府期間は 3 ヶ月と短く、朝鮮外交を担った対馬藩も 3 年に 1 度の参勤、在府期間は 4 ヶ月、松前藩は 6 年に 1 度の参勤でした。水戸藩のように常に在府し、参勤交代をしない大名もありました²⁰⁾。

大名・旗本たちは予定の参勤期日をあらかじめ幕府に願い出なければなりません。元禄期頃、12 月・正月の伺い出は禁止され 10・11 月、2・3 月に伺いを出すよう下命がありました。その後紆余曲折を経て、享保 17 年（1731）以後、外様大名は 11 月、譜代大名は 2 月に参勤伺いを出すのが通例となりました²¹⁾。

名著『主君「押込」の構造』の著者・笠谷和彦氏は、マックス・ウェーバーの『支配の社会学』を引いて、主君が従臣に領地を恩給し、従臣が主君に軍役義務の奉公を果たすという主従関係によって秩序づけられる封建制度において、各領地の領主である従臣の側が定期的に主君あるいは上級領主の下に赴いて臣下の礼を捧げ、変わらぬ忠誠を表現することは当然で普遍的な現象である。中世ドイツの封建制社会でこれは「主邸参向（Hoffahrt）」と呼ばれて制度化されていた。日本の参勤交代が特殊な点は、定期的に厳格に実施され、全国の名大を網羅して完全に近い形で実施されたことである、と述べています²²⁾。

²⁰⁾ 市川寛明「参勤交代」（前掲『徳川幕府事典』）所収 43～4 頁、佐藤宏之「参勤交代」（前掲『江戸幕府大事典』）所収 893 頁。

²¹⁾ 丸山雍成『参勤交代』吉川弘文館 平成 19 年 108 頁。

²²⁾ 笠谷和彦「参勤交代の文化史的意義」（芳賀徹編『文明としての徳川日本』中央公論社 平成 5 年）所収 138 頁、同氏「参勤交代と外国人行列」（高階秀爾・田中優子編『江戸への新視点』新書館 平成 18 年）所収 30 頁。

世界史的な広がりの中で日本の参勤交代制度を捉え直した貴重な見解だと思いますが、筆者は日本の徳川期の参勤交代がドイツの「主邸参向」制度と最も異なる点は、俗に言われる「人質制度」、大名の正室や嫡子を人質として江戸に置かせた制度が参勤交代制度とあたかもセットになっているような形で実施された点だと思います。妻子の江戸居住は文久2年（1862）まで続きました。幕府（将軍）と大名・旗本との臣従関係は相互の信頼よりも従臣に対する束縛と統制によって保持されていたと言えるでしょう。

しかし、参勤交代は徳川社会に絶大な経済的効果をもたらしました。本来、五街道その他の主要道路は多数の武士を迅速・大量に移動するために整備されたものです。宿駅・人馬継ぎ立て制度・問屋場・本陣・旅籠などの施設や制度は、戦乱が起こった時、大量に軍隊と荷物を送るためや、将軍の京都上洛・日光参詣、大名・旗本が参勤交代を行なうために設置されたものでした。しかし、島原の乱以後平和が続く、将軍の上洛・日光参詣も次第に見られなくなり、参勤交代だけが多数の人員と大量の物資の移動を継続し続けました²³⁾。

加賀藩の参勤交代のように徳川後期になっても2000人を越える供揃えを要したケースは特別であるにしても、多数の旗本・大名の参勤交代が続けられた結果、宿場はもとより、街道周辺の農村住民にも多大な恩恵がもたらされました。本陣・旅籠・木賃宿への生鮮食料品の販売、荷物の運搬労務など、地域社会に大きな所得機会が生み出されました。全国の街道・宿場の整備が一般庶民の神社仏閣への参詣、名山・名湯への旅を促したことは言うまでもありません。家臣たちを含め、大名・旗本たちが参勤交代の旅を通して、世間の見分を広め、江戸の文化を享受できる機会を得たことも参勤交代の大きな効果の一つであると言えるでしょう。

4 参勤行列

参勤行列は行軍か

さて、『一路』の物語に戻りましょう。焼け跡から見つけ出した「行軍録」には「参勤交代之御行列ハ行軍也」と書かれていました。道中笠の麓庵は強

²³⁾ 笠谷和彦 前掲「参勤交代と外国人行列」31～3頁。

くこれを肯定しましたが、参勤行列は行軍であるというのは本当の事でしょうか。

大名行列の研究で知られる近世武家社会史の研究者・根岸茂夫氏は「参勤交代行列の構造」と題する講演で、東北・南部藩 20 万石の『南部藩参勤交代図巻』を素材にして参勤交代行列の意味を読み解く試みをされました。YouTube で観たその講演の要旨の一部を記します。絵巻を見て頂くことはできませんが、行列の先頭から順に行列者の役割を説明されているので、十分理解していただけたと思います。

絵巻の冒頭、火縄銃が入った袋を担いだ鉄炮隊が進み、その後から弾薬が入った玉箱、鎧が入った具足櫃、続いて馬に乗った鉄炮隊の隊長（御鉄炮先手役）が行く。馬の口を取る口付、草履取、傘持、挟箱持、鎗持など多数の家来を従えている。

続いて弓、長柄（鎗）が行くが、この順序は敵が近づいた時、まず鉄炮を撃ち、続いて矢が加わり、さらに敵が近づくと長柄隊が突っ込むという戦闘の手順を表現している。長柄隊の隊長の後には馬（鼻馬）が 5 疋描かれている。ここまでが前衛部隊である。

鼻馬の後には御陳（陣・・本来は陳）長持や旗竿が続き、さらに挟箱、鎗、鉄炮、弓、笠、長柄傘が行く。これは大名家の武威を示すものである。これに対して藩主が乗った駕籠の後の藩主の蓑、薬弁当、水弁当、御茶弁当、御茶道具は駕籠の前とは対照的に藩主の日常品である。藩主の後を側用人が進む、駕籠に乗り、弓や刀を入れた刀筒を持たせ、馬を率いている。続く家老の行列には鉄炮 5 挺、箱、鎗等が加わっている。

参勤交代の行列は戦国時代から江戸時代にかけて作り上げられた武家の軍隊の行列であり、軍隊の基本が大名行列にも転用されたものである²⁴⁾。

徳川中期に 5 ～ 600 人、後期でも 300 人に及ぶ行列人数の南部藩と「五十

²⁴⁾ 根岸茂夫「参勤交代行列の構造」（令和 2 年度國學院大學公開学術講演会 YouTube 「國學院大學動画アーカイブ」、講演の内容を纏めた大東敬明氏「國學院大學研究開発推進機構ニュース」Vol. 14 No. 2 の記事も併せて参考にさせていただきました。

徒士（かち）」での参勤をめざす旗本・蒔坂左京大夫の行列は数の上では比べものになりません。しかし、紛れもなく「行軍録」の冒頭の言葉「参勤交代之御行列ハ行軍也」に誤りはなかったのです。

では、一路が差配する蒔坂左京大夫一行の行列は行軍に似つかわしい形になっていたのでしょうか。

物語の中盤、吹雪の朝まだき、下諏訪宿を宿場役人の引き止めるのもきかず出立した蒔坂家の参勤行列を湯田町の旅籠の2階から道中笠の臈庵と髪結いの新三が眺める場面があります。先頭は鉦叩きの陣笠、猩々緋の陣羽織を身につけ、片鎌十文字槍を携えた佐久間勘十郎、続いて朱槍を持った双生の奴、御先箱持ち、槍持ち、銃持ち、徒士たち、供頭と近習が護る殿様の駕籠、挟箱を担いだ小者たち、2疋の御手馬、弓組の一団、後詰めの徒士たち、殿（しんがり）には騎馬の蒔坂将監が続きます²⁵⁾。小規模ながら理に適った行軍の陣形です。

参勤行列の縮減は「横着」のなせる業か

もう一つ、道中笠の臈庵は「200年300年立つ間に参勤交代は随分変わってしまったが、それは「横着」のなせる業だ」と言います。蒔坂左京大夫の参勤道中に引き付けて言えば、供揃えの人数や携えていく武具の数を減らし、殿様の乗る馬も替え馬を用意しないなどということでしょう。供人数、携帯武具、替え馬の削減など、参勤行列の規模の縮小は本当に「横着」から生じた現象だったのでしょうか。

そもそも寛永12年（1635）の「武家諸法度」に「大名小名江戸交替相定むるところ也。毎歳夏四月中参勤致すべし。従者の員数近来甚だ多し。且つは国郡の費え、且つは人民の労（つか）れ也。向後其の相応を以てこれを減少すべし²⁶⁾。（下略）」と記されているように、江戸幕府自体が供揃えの縮減を命じています。ですから、これまで広く言われてきた「江戸幕府は大名の経済力を弱めるために参勤交代を実施した」という説は明らかに誤りです。

その後も幕府の大名行列に対する規制は続きます。例えば安永5年（1776）には、限られた大名や旗本以外、特別な仕様の駕籠（打揚…戸の代わりに簾

²⁵⁾ 浅田次郎 前掲『一路（下）』16～7頁、文庫下 19～20頁。

²⁶⁾ 寛永12年6月21日「武家諸法度」（児玉幸多・佐々木潤之介編『史料による日本の歩み 近世編（新版）』吉川弘文館 平成8年）所収 42頁。

を下げた駕籠、引き戸駕籠より格が上、打揚げ腰網…底に檜の薄板網を貼った駕籠)、虎皮の鞍覆い、長柄傘のうち爪折傘(骨の先を曲げて作った傘)の道中での使用を禁じています²⁷⁾。

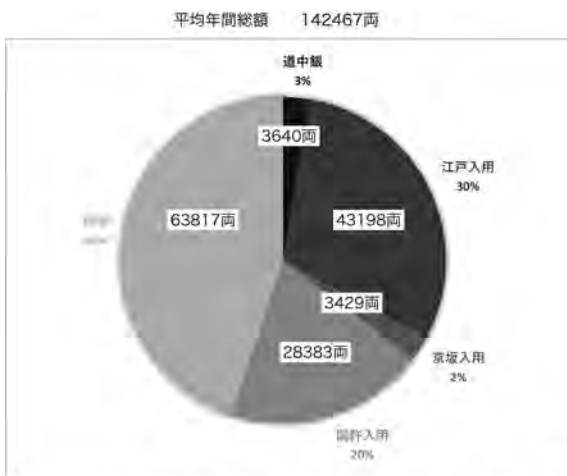
根岸茂夫氏は先に触れた講演で、「武家の行列は、見せる行列であり、見られる行列でもあった。」と述べられています²⁸⁾。幕府の度々の規制にも拘わらず、他大名・旗本に家格や家風を誇示し、庶民を威圧するために、できるだけ供の数を増やし、諸道具で飾り立てた華やかな参勤行列を望む気風は長く保持されました。

しかし、なぜ次第に参勤行列が華やかさを失い、小規模化していったのか、その原因は財政問題に尽きると思います。

図4は松江藩18万6千石の財政比率をグラフで示したものです。参勤交代道中費の比率が全体の3%できわめて低いように感じられるかも知れませんが、最低でも現代価格1両=10万円と見積もれば、3億6400万円です。しかも、参勤交代と切り離せない江戸入用、つまり1年間の江戸在府期間中の諸経費は43億1980万円に達します。参勤交代・江戸在府費用は莫大な額に達し、大名・旗本家の財政を圧迫していたのです。

様々な研究者が徳川後期における諸藩の参勤交代の窮状について述べられていますが、同じく中国地方の鳥取藩32万5千石の事例は特に悲惨です。鳥取藩では財政逼迫状態が続き、財政改革・倭約令・御用金賦課など改善策

図4 松江藩の財政比率(文化元年～15年の年間平均額)



山本博文氏作成のグラフ「松江藩の財政」(竹内誠監修(江戸時代館) 小学館、平成14年 67頁)を改変

²⁷⁾ 根岸茂夫『大名行列を解剖する 江戸の人材派遣』吉川弘文館 平成21年 137～42頁。

²⁸⁾ 同氏 前掲講演「参勤交代行列の構造」。

に取り組んだのですが、好転せず、ついに文化 12 年 (1815) と文政 4 年 (1821) には、挟箱 4、馬 1 疋、御台傘 (長柄の先に傘をつけ、その上にさらに黒ビロード製の飾り傘をつけた傘) なし、先供徒士 5 人で参勤道中に臨みました。その省略ぶりは「前代未聞」、「拝見の人、愁腸を含まざるはなし」という有様でした²⁹⁾。

旗本・蒔坂左京大夫家の参勤行列も同様でしょう。一路の先祖・歴代小野寺家の道中供頭たちは徳川家康拝領の朱槍 2 筋を捧げ持つ道中槍持奴、鉦叩きの陣笠、猩々緋の陣羽織の出で立ちで片鎌十文字槍を携えて歩む先手侍、殿様の替え馬 1 疋の廃止を悲しんだに違いありません。やむなく廃止に至った後も復活を祈り続けてきたはずです。一路の父をはじめ小野寺家の先祖の人々は八幡社に秘蔵されてきた「東照権現様御賜之朱槍二筋」の手入れを怠りませんでした³⁰⁾。供の数を増やせば旅籠代、弁当代、草鞋代その他の諸々の経費が嵩みます。替え馬にも飼料代、まだ日本には蹄鉄がなかったために草鞋代がかかるのです。参勤行列の縮減は「横着」のなせる業などではありません。

5 中山道の旅へ

御発駕

文久元年 (1861) 12 月 3 日早朝、弱冠 19 歳の青年供頭・小野寺一路の差配の下、旗本蒔坂左京大夫一行は江戸参勤のために旅立ちます。田名部領内の町人・百姓たちの見送りを受け、道中祈願のために田名部八幡社に詣で、神主のお祓いを受けた後、飲み干したお神酒の杯を地面に叩きつけて割り、全員で刀・脇差しを抜いて勝ち鬨 (どき) を挙げます。まさに行軍の武運を祈る儀式です。これまで三十徒士であった左京大夫の参勤道中の供の数はこの度は徒士 (かち) 侍だけでも 50 人、中間・小者 30 人、合わせて 80 人ほどに増えていました³¹⁾。簡単に言うと、騎乗を認められない下位の武士が徒士 (かち) です。徒士の下層の足軽までが士分でした。中間 (ちゅうげん)・

²⁹⁾ 丸山雍成 前掲『参勤交代』226～7 頁。

³⁰⁾ 浅田次郎 前掲『一路 (上)』51 頁、文庫上 58 頁。

³¹⁾ 同上 『一路 (上)』140 頁、文庫上 154 頁。

小者は武家奉公人で、厳密に言えば武士ではありません。中間は荷物運び・門番など、小者は小人・下男とも呼ばれ、主人の雑用に従事しました。

中山道・常備人馬・助郷

こうして古式ゆかしい蒔坂左京大夫一行の中山道の旅が始まります。中山道は徳川期の五街道の1つで、五街道とその付属街道を統轄する道中奉行の支配を受け、東海道の裏街道としての役割を果たしていました。江戸日本橋を起点にして板橋宿を経て本郷追分宿で日光街道と別れ、武蔵国・上野国・信濃国・美濃国・近江国を経て守山宿まで67宿、その隣の東海道と合流する草津宿、さらに大津宿を加えて69宿、京都三条大橋に至る街道です。67宿説と69宿説の2通りの説があります。各宿場には50人・50疋、ただし木曽路11宿は25人・25疋の常備人馬（伝馬人足）を置くことが義務づけられていました。しかし、常備人馬は必ず御定めの数だけ宿場に揃えておかなければならないという意味ではありません。1日に規定の数だけ提供する義務があるということで、1疋の伝馬が1日に2回勤めれば2疋と数えます³²⁾。

常備人馬の利用料金の支払い方法には無賃・御定賃・相対賃の3つの方法がありました。公家・高僧・上級幕府役人などの公用旅行者が使用する際は無賃でした。御定賃は幕府公定の賃で、参勤交代の場合、大名・旗本の領知高に応じて一定数利用することが認められていました。しかし、超過分は常備人馬ではなく、人馬稼ぎの者と交渉して賃を決める相対賃によらなければなりません。相対賃は御定賃の2倍程度の額でした。なお、公用の客がなく常備人馬が空いている時は相対賃で人足賃と駄賃さえ払えば庶民でも常備人馬を利用できました³³⁾。

蒔坂左京大夫のこの度の供の数は80人、知行7500石の旗本が認められる御定賃の支払い枠はどの程度だったかはわかりません。一路は国分七左衛門から大枚100両を渡されましたが、道中費用は少ないに越したことはありません。相対賃の支払いが少なく済むことを祈るばかりです。

³²⁾ 児玉幸多「中山道」（前掲『国史大辞典』第10巻）所収 597頁、杉山正司「中山道六十七宿」（児玉幸多編『日本史小百科 宿場』東京堂出版 平成11年）所収 64～7頁。

³³⁾ 渡辺和俊「宿駅財政」・「伝馬と駄賃馬」（同上書）所収 91・106～8頁。

『一路』でも触れられているので、助郷（すけごう）について少し記します。参勤交代や公用旅行者の往来が活発になるにつれて、次第に常備人馬だけでは対応できないケースが増加しました。これを補うために幕府は宿駅周辺の特定の村々を助郷（村）に指定して宿駅の伝馬役負担を支援することを命じました。助郷には通行量が多い時には常に一定数の人馬が宿場に出なければならない定（じょう）助郷、宿場と定助郷の人馬だけでは足りない時に領主や代官の指示によって出役を要請される大助郷の他、大混雑が起こった場合さらに広範な地域の村々から徴発される増助郷、加助郷など様々なタイプの助郷がありました³⁴⁾。小説『一路』では、木曾福島関所番頭檜山角兵衛が、与川越えの際、捨てざるを得なかった行列荷物を一つ残らず拾い上げ、助郷人馬を使って下諏訪宿まで運ばせてくれました³⁵⁾。

問屋場・本陣・脇本陣

後は問屋場・本陣・脇本陣のことをある程度知っていれば、『一路』の物語を楽しむのに十分だと思います。宿場には問屋場があり、宿（しゆく）役人がいました。人馬継ぎ立ての差配をしたり、公用旅行者のために本陣・脇本陣の世話をしたりしました。宿役人の職位は問屋・年寄・名主の順で、よく言われる村方三役（庄屋・組頭・百姓代）に倣って「宿方三役」と言われていました。宿役人とは彼らのことです。宿役人の下役として、人馬の出入り・賃金を記帳するだけでなく、人馬の差配、客との交渉にも当たる「帳付」、馬方や人足を指図する馬指（うまざし）・人足指がいました。宝永2年（1704）に幕府代官手代などを宿場に常駐させたこともありましたが、正徳2年（1712）に廃止されました。問屋役は土豪などの血筋を引くその地域の有力者が多く、本陣の当主や町名主を兼ねる者も多数いました³⁶⁾。

本陣は参勤交代の大名をはじめ宮家・公卿・高僧・将軍・幕府役人など貴人が休泊する施設であるのに対し、脇本陣は本陣の補助的な休泊施設というべきものでした。本陣には門構えや玄関があり、多数の座敷、板間、土間、

³⁴⁾ 同氏「伝馬役と助郷役」（同上書）所収 109～11頁。丸山雍成「助郷」（前掲『国史大辞典』第8巻 昭和62年）所収 84頁。

³⁵⁾ 浅田次郎 前掲『一路（上）』291頁、文庫上 319頁。

³⁶⁾ 兒玉幸多「宿役人」（前掲『国史大辞典』第7巻 昭和61年）所収 335～6頁、深井甚三「問屋場」（同上書 第10巻 平成元年）所収 13～4頁、渡辺和俊「宿役人と問屋場」（前掲『日本史小百科 宿場』）所収 104～5頁。

優美な庭園を備え、広大な面積を占めていました。脇本陣も同様な施設を備えていましたが、屋敷地や建坪で本陣には及びませんでした。

大名・旗本が本陣に休泊する場合、最低数 10 日前から予約が必要です。本陣の間取図、絵図面を送付させて休泊時の宿割を計画しておきます。休泊の数日前には宿割役人が直接本陣を訪れ、本陣・脇本陣・下宿（したやど）の宿割・宿料の交渉をしておかなければなりません。休泊当日、本陣の門前と宿入口に大名・旗本の名前と休泊の別を書いた関札（宿札）を立て、他の大名・旗本との差し合いを防ぎます。一方、本陣の表門・玄関には紫縮緬、表構には麻の大名・旗本の定紋（家紋）が入った幕を張り、同じく定紋の入った提灯を立てます。休泊当日は宿役人や本陣・脇本陣の当主が宿場入口まで出迎えました。

料理人を連れている大名は本陣の家族などが手伝って自身賄いをしますが、中小の大名・旗本の多くは料理人を連れず、本陣賄いの食事をとりました。その場合は座敷代・宿料の他に食事代を払う必要がありました。それだけではありません。本陣の家族や召使いなどに祝儀を渡し、献上品をもらった場合は謝礼金を渡すのが建前でした。これはほぼ脇本陣の場合も同様です³⁷⁾。

旗本・蒔坂左京大夫一行に料理人が加わっている様子はみえません。明らかに本陣賄いですね。

6 それぞれの参勤道中

著者は中山道を江戸に向かう旗本・蒔坂左京大夫一行の旅のあれこれを巧みな筆致で綴っています。本稿では殿様・蒔坂左京大夫、主人公の道中供頭・小野寺一路、この 2 人に焦点を絞り、道中での彼らの行動を追いつつながら、それぞれの思いを探っていくことにします。なお、蒔坂左京大夫の参勤道中の旅程を表 2 に、小説『一路』の主要登場人物の一覧を表 3A・B にまとめてみましたのでご活用ください。作中に名前が記されていない登場人物は割愛致しました。

³⁷⁾ 以上、本陣・脇本陣については、丸山雍成「本陣」（前掲『国史大辞典』第 12 巻 平成 3 年）所収 820 頁、柳田和久「本陣・脇本陣」（前掲『日本史小百科 宿場』）所収 1120～1 頁。

名君の蹉跌 旗本・蒔坂左京大夫

殿様・蒔坂左京大夫が替え馬の「ブチ」を駆って、与川崩れを踏破し、行列の供人たちを活気づかせる場面があります。この時、悪の頭目蒔坂将監と彼に加担させられている側用人の伊東喜惣次がこんな会話をします。

「将監様、拙者はおもう、何が何やらわからなくなり申した」「あなた様はうつけとおっしゃいますが、お殿様はもしやもしや、いわゆる名君なのではござりますまいか」「これ伊東、軽々に物申すでないぞ。名君というのは、たとえば有徳院様とか、あるいは保科正之の公とか、近いところでは上杉鷹山公

表 2 蒔坂左京大夫参勤道中旅程表

月日	宿泊地	家数(軒)	人口(男)	人口(女)	総人口	旅籠(軒)	本陣(軒)	脇本陣(軒)	
12月3日	田名部 → 加納(賽者番・永井肥前守城下を乗り打ち) → 鴨沼	68	119	127	246	25	1	1	
12月4日	→ 太田 → (尾張家代官陣屋・川並番屋) → 伏見 → 御旅 → 細久手 → (西洞坂、殿様初めて替え馬「ブチ」に乗る) → 大湫	66	170	158	338	30	1	1	
12月5日	→ (平六坂・先の若年寄・松平河内守の行列と遭遇) → 大井 → 中津川 → 落合 → 馬籠 → (火事で両腕を亡くした少女スワに会う「万が一じゃ」) → 妻籠	83	216	202	418	31	1	1	
12月6日	→ 三留野 → (与川崩れを押し渡る) → 野尻 → 須原 → 上松	362	1258	1224	2482	35	1	1	
12月7日	→ (木曾福島関所) → 福島 → 宮越 → 萩原 → 奈良井	409	1104	1051	2155	5	1	1	
12月8日	→ 鵜川 → 本山 → 洗馬 → 堀尻 → (殿様、少女スワの幸を祈るため諏訪神社下社秋宮参拝) → 下諏訪	315	706	639	1345	40	1	1	綿の湯
12月9日	→ (和田峠越え、御手馬「白雪」死す) → 和田	128	272	250	522	28	1	2	
12月10日	→ 長窪 → 芦田 → 望月(昼食) → 八幡 → 塩名田 → (殿様、内藤志摩守を訪う) → 岩村田	350	803	829	1637	8	0	0	本陣は機雲寺
12月11日	→ 小田井 → 追分 → (加賀藩主妹・乙姫の行列に遭遇) → 沓掛 → 軽井沢 → (殿様発熱) → 坂本 → 松井田	252	547	462	1009	14	2	2	
12月12日	(殿様、安中藩主・板倉主計守の病氣見舞いを受ける)、(幕府への看到遅れの届け状を安中遠達「風神の秘走」の3人に託す)、(夜半、一路、乙姫と再会する) → 松井田	//	//	//	//	//	//	//	千仁田蔵
12月13日	(殿様本復) → 安中 → 板鼻 → 高崎 → 倉賀野 → 新町 → 本庄 → 深谷(小諸藩主・牧野遠江守と本陣差し合い、牧野遠江守＝本陣、蒔坂左京大夫＝脇本陣で落着く) → 深谷	524	895	1033	1928	80	1	4	
12月14日	→ 熊谷 → 鴻巣 → 桶川	347	717	727	1444	36	1	2	
12月15日	→ 上尾 → 大宮 → (殿様、氷川神社に参拝、将監一味の刺客と対決、2名を斬殺、寺社奉行・井上河内守一行と遭遇、難を逃れる) → 浦和 → 板橋 → (戸田の渡し、蒔坂将監、御座船舶中でひぐらし浅次郎に刺首される) → 板橋 → 江戸本所吉田町蒔坂家江戸屋敷に到着								

各宿場の家数、人口、旅籠数、本陣、脇本陣数は天保14年「宿村大概帳」に基づく
兒玉幸多編『日本史小百科 宿場』東京堂出版 平成11年 283～8頁の付表による。

表 3A 小説『一路』の主要登場人物の役職・人物・役割（馬 2 疋を含む）

人名	役職あるいは続柄、家縁、年齢ほか	役割
小野寺一路	参観道中供頭 19 歳 江戸神田相泉園東条学塾頭・北原一刀流免許皆伝の細才	謀殺された父に代わり参観道中供頭を務める。
小野寺弥九郎 与平	一路の亡父 前参観道中供頭 家縁 80 歳 小野寺家の下男	幕府将監一味に服し薬を飲まされ、屋敷に火をつけられて焼死した。 一路の父・弥九郎の亡骸を菩提寺に運び供養。武家屋敷の焼け跡から「行軍録」のあった文箱を発見する。
幕坂左京大夫	奥本・交代寄合表御礼衆 20 家の筆頭 34 歳 7500 石(知行高) 帝親間詰 幕坂家 39 代・14 代幕坂左京大夫 9 歳のとき家督を襲封。	うつつのふりをしながら実は名君？
由比世刀	国家老	幕府将監と結託し、幕坂左京大夫を失脚あるいは亡き者にし、御家の転覆を謀ろうと企てる。
幕府将監	御家門 左京大夫の後見役 幕坂左京大夫の父の従弟の子。子になかったために一掃幕坂家の跡継ぎとして養子に迎えられたが、左京大夫が生まれたため廃嫡され、左京大夫の家臣・後見役になった。	幕坂左京大夫を失脚あるいは亡き者にし、御家の乗っ取りを企てる。 参観道中での起る悶着をきっかけにして左京大夫を隠居に追い込もうとする。
幕坂ぬい	幕坂左京大夫の側室 幕府将監の娘	雛女・わがまま・やきもちやき。
龍庵	道中頭、実は御庭番	一路に「行軍録」に則った参観行列を実現するように努める。参観道中の供となる。
新三	道中髪結い	一路に誘われ、参観道中の供となり、一行の髪結いを務める。
丁太・半次	双子の博勞	身長 6 尺余り、目方は 25 貫目ほど。参観行列の槍持ちを務める。馬道い唄名唱。
国分藩	一路の許嫁	一路のために道中用の羽織袴を寄贈、旅籠「越屋」に届ける。
国分七左衛門	幕坂家勘定役・将来の一路の岳父	道中費用を受け取るために勘定方を訪ねた一路に通例の賄い料 50 両に裏金 30 両、自腹 20 両を加え、100 両を手渡す。
空澄	田名部・浄願寺住持	一路の父の死後、直ちに参観道中の宿問の手配に旅立つ。参観行列では先遣を務める。
栗山真吾	参観道中供頭添役 幕府将監一味に謀殺された父に代わり供頭添役を務める。	与川崩れで、捨てることを余儀なくされた幕坂家の家宝、武田信玄縁故の「黒漆徳義輪飾笏」「黒地黒糸絨刺丸」を納めた箱籠を受け止め、守り抜く。
佐久間勘十郎	幕坂家蔵役	筋骨隆々の偉丈夫・男前・剛悍・気風があるが単純。参観道中の先手を務める。佐久間玄蕃九郎政の末裔。
白雪	幕坂左京大夫の御手馬、芦毛馬(灰色)の雄馬	雪中の和田峠越え。命尽きる。
ブチ	幕坂左京大夫の唇え馬、まだらの雌馬	殿様を乗せて与川崩れを渡り切り、続く一行を鼓舞する。
伊東喜惣次	側用人 300 石	元幕府将監の部属。幕坂左京大夫の失脚を謀ろうとする幕府将監の策謀の失敗後、幕坂家江戸屋敷の土蔵の中で自害する。
幕坂すず	幕坂左京大夫の正室	台所の発配に当たり、まめめしく働く。気性良く、笑顔良し。
成瀬善左衛門	太田陣屋目付役並 60 歳の老役人 30 石	代々太田の本番、家督を継いだ伴が太田で水死後、一代限りで家名断絶・縁戻の条件で、目付役に復帰。
松平河内守	前若年寄	免職となり、国元に戻る途中、左京大夫の行列と差し合いになる。
スワ	9 歳の少女。馬籠宿の大火で両親を失い、庄屋宅に引き取られた。翌年春堀屋宿に将来遊女になるため売られる定め。	夜、幕坂左京大夫の参観行列に遭遇、左京大夫に抱かれ、焼死した父親の面影を追う。供人たちからも多数の施しを受ける。
矢島兵助	田名部陣屋西の丸組付、10 俵 3 人扶持。身が軽い。一名、「狼(ましら)の兵助」。中村仙蔵の従兄弟・栗山真吾のまたいとこ。剣の腕も立つ。	与川崩れを越える先陣を務める。
中村仙蔵	田名部陣屋西の丸組付、10 俵 3 人扶持 矢島兵助の従兄弟・栗山真吾のまたいとこ。剣の腕も立つ。	与川越えで矢島兵助の相方を務める。
横山角兵衛	本曾代官山村家家来、本曾福馬屋所番頭 42 歳	一路一行が与川崩れで捨てた道中諸道具を回収し、下諏訪宿に届ける。
大賀伝八郎	諏訪高島藩下諏訪宿役人 15 歳から諏訪因幡守の小姓として江戸詰め、20 歳の時、父の急逝で宿場役人を引き継ぐ。	一行の吹雪のなかの和田峠越えを思いとどまるように幕坂左京大夫に直接訴える、和田峠越えで一行が捨てたり落したりした荷物を行列に追いついて届ける。
辻井良軒	医師 27~8 歳 大坂通塾で蘭方医学を修めた。幕府将監が大坂出張の折、田名部に連れ帰る。	伊東喜惣次に命じられ、一路の父と栗山真吾の父を亡き者にするために、それぞれ服薬・毒薬を処方した。
内藤志摩守正義	信州岩村田藩主 17 歳 領知高 1 万 5 千石 日光誓礼奉行を歴任、現幕府奏者番、築城を許され、「藤ヶ城」を建設中。城主格大名となる。	役職を鼻に掛け増長、生意気。
浅井条右衛門	岩村田藩宿老	天狗になっている藩主・内藤志摩守を必死で鎮めるが・・・。
乙姫	加賀藩前田宰相慶家の妹 16 歳	行列を組んで江戸下屋敷に向かう途上、小野寺一路に遭遇し初恋。膳厨玉の簪を手向け。翌晩、星空の下で一路と再会。
鶴橋	乙姫の世話役。乙姫を幼少から養育した。	一路に今一度逢いたいと思う乙姫の思いを叶えるために奔走する。

表 3B 小説『一路』の主要登場人物の役職・人物・役割

板倉主計頭勝股	上野国安中藩主 42歳 毎朝家臣・領民を先導して「安中の遠足」を随行。 毎旦 城下から雄水峠の頂上まで往復。	発熱のため松井田宿本陣で伏せる蒔坂左京大夫を見舞う。家臣 3 名に命じ、蒔坂左京大夫参勤一行の江戸着到遅れの届け状を江戸屋敷に届けさせる。
根本国蔵・石塚与八郎。海保数馬	安中藩家臣 第一走者・第二走者・第三走者	「風陣の秘走」の術を用いて、蒔坂左京大夫参勤一行の江戸着到遅れの届け状を江戸屋敷に届ける。32 里を 3 刻半、つまり 128 ㎞を 7 時間で疾走。
ひぐらし浅次郎	田名部生まれ、佐久間助十郎の幼なじみ。その日暮らしの親世人、居合の達人、郡奉行であった父が、蒔坂将監の奸計で革職所払いの重罰を受けたため、一家で彦根に移住。数年後、父は流行病で死去した。親分衆の助太刀を身過ぎとする。江戸所払いとなり、10 年ぶりに父母の墓所の彦根に戻った。	江戸戸田の渡しで蒔坂将監をはじめ一味を斬り捨て、御家剥奪の陰謀を挫く。
黒岩一郎太	信州小諸藩家臣 道中供頭 19 歳 父が卒中で倒れたため、引き継ぎも経験もないまま、大役を命じられた。	深谷宿で蒔坂左京大夫一行と本陣差し合いとなり、苦慮する。
牧野遠江守鼎哉	信州小諸藩主 1 万 5 千石(瀬田高) 常陸国笠間 8 万石牧野氏からの養子	名君、赤子への子育米、貧窮老人への敬老手当の支給、権威普及の推進など善政を行なう、奏者番・若年寄を歴任、深谷宿で蒔坂左京大夫一行と本陣差し合い。
神崎又兵衛	書院番組頭 蒔坂左京大夫の岳父 正室すずの父、50 歳を超える、1200 石→2000 石(見込み) 御使番・目付・作事奉行を歴任	大目付・道中奉行加役の内示を受ける。
榎山義右衛門	蒔坂家江戸屋敷留守居役 77 歳 故事礼式に通曉 老中松平豊前守の茶の道の師。一見隙だらけの呆けた老人にみえながら実は確然たる気構え。	3 人の安中藩家来が届けた着到遅れの届書を月番老中松平豊前守に提出。
小野寺せつ	小野寺一路の母	江戸住まい、荷身、一路一行の江戸着到遅れの報を受け、一行の無事を願う夜半水垢離をする。
井上河内守	寺社奉行	武蔵国一宮氷川神社に將軍の代参で訪れ、蒔坂左京大夫と遭遇、一緒に参拝する。
海老沢吉三郎	大宮宿代官支配公方手付	氷川神社境内で蒔坂将監に与して主君の秘述をはかり討たれた蒔坂家臣 2 名の斬死体の処理に当たる。
松平豊前守	丹波篠山藩主 奏者番・寺社奉行・大坂城代・老中を歴任 蒔坂家江戸屋敷留守居役 榎山義右衛門を茶の道の師と仰ぐ。	榎山義右衛門の説得によって参勤途上で謀反を企てた蒔坂将監を家中で成敗した作を不問に付すこととする。

とかの、そうしたお方を指すのじゃぞえ。あの芝居狂いの鼻たれの、みそっかすの大うつけのどこが名君であるものか³⁸⁾」

将監は名君の代表として 8 代將軍徳川吉宗 (1684 ～ 1751) と会津藩主保科正之 (1611 ～ 72)、上杉鷹山 (治憲 1751 ～ 1822) を挙げています。将監が言う名君とは一体どのような殿様を指すのでしょうか。

徳川吉宗は享保の改革で、上杉鷹山は米沢藩の経済改革でよく知られています。鷹山は藤沢周平氏の遺作『漆の実のみのる国』が記憶に新しいのではないのでしょうか。保科正之は地味ですが、3 代將軍徳川家光の弟で、幕政にも関わりが深く、家光の死後、4 代家綱を助け、殉死の禁止に努力しました。殉死の禁止は家臣は主人個人に仕えるのではなく、跡を継いだ新しい主人にも仕えること、主人の家は代々主人であり続けることを意味します。御家転

³⁸⁾ 浅田次郎 前掲『一路 (上)』269 ～ 70 頁、文庫上 295 ～ 6 頁。

覆を企てようとする蒔坂将監が下剋上を阻止する政策を打ち出した保科正之を名君の一人に挙げたことは迂闊の極みと言えるでしょう。

後世、名君と言われる殿様たちにはほとんどブレインがついていました。代表的な例を挙げると、保科正之には山崎闇斎（朱子学）、岡山藩主・池田光政（1609～82）には熊沢蕃山（陽明学）、加賀藩主・前田綱紀（1643～1724）は木下順庵（儒学）、徳川光圀（1620～1700）は朱舜水（中国明からの亡命者・儒学）、上杉鷹山には細井平洲（折衷学派）がついていました。もしかして一路の父親・弥九郎は江戸神田和泉橋東条学塾塾頭の息子がさらに学問を究め、殿様・左京大夫のブレインになる事を期待していたのではないのでしょうか。

さて、旗本・蒔坂左京大夫は、一端蒔坂家の跡継ぎとして迎えられた蒔坂将監が自分が生まれたために廃嫡され、代わって自分が蒔坂家の当主になったことに何かしらの負い目を感じています。「将監を軽んずべからず。父と思ひ父祖の霊代と侍んで重んずべし」が左京大夫の父の口癖でした³⁹⁾。彼は父の教えを守り、常に将監に敬意をもって接しましたが、そのことが逆に将監の家中での専横を許し、ついには御家の転覆を狙う様な大事を引き起こす発端になりました。

左京大夫は自分を「うらなり」と意識しています。役者そのものの細面、色白、女性のような撫で肩、清元の三味線のような高く澄んだ声、蚊蠅にも怯える気弱ぶり⁴⁰⁾、いわゆる「優男」なんですね。それに加えて無類の芝居好き、芝居小屋の裏木戸で最良の出待ちをし、町方に捕まって謹慎を申し付けられたり、松の廊下で飛び六方を踏み、「当分登城禁止」を命ぜられたり、それらが江戸の瓦版に載る始末です⁴¹⁾。家来たちにかける言葉も行動もしばしば芝居じみしています。さらに時々「うつけ」を演じます。よく言えば、彼は演じている自分を常に意識し、自分を客観視できる資質を具えているのです。まるで「人は役者、世界は舞台」（シェークスピア『お気に召すまま』）とか、「離見の見」（世阿弥元清『花鏡』）を地で行く殿様です。

佐久間勘十郎が供頭の一路と添役の栗山真吾に殿様・蒔坂左京大夫について

³⁹⁾ 同上『一路（上）』152～3頁、文庫上 168～9頁。

⁴⁰⁾ 同上『一路（上）』155～6頁、文庫上 170～2頁。

⁴¹⁾ 同上『一路（下）』293頁、文庫下 327頁。

て自分の心境を語る場面があります。その要点を記します。

「田名部衆はみな遥か昔から蒔坂家の御禄を食み、蒔坂左京大夫の名とともに十数代を重ねてきた。しかし、御側衆でもない限りほとんどの者は殿様の顔すらまともに見たことはない。「よきにはからえ」だの「大儀じゃ」だの「祝着じゃ」だのほんの鶴の一声を年に一度聞くのがせいぜいだ。それほど隔りのある殿様に身を捨てて忠義を尽くす方がおかしいとこれまで思っていた。しかし自分は、出立直後、生まれて初めて忠義の心が芽生え、それまで感じたことのない意識が腹の奥底から迫り上がってくるのを感じた。それまで声も顔もよく知らなかった殿様としばしば接するうちに、馬前に死する誉を夢見たのだ。

陣下を出発する時、見送りに出ていた母親から泣き続ける赤子を抱き取ってあやした。この時は酔狂な、殿様は権威の象徴、お飾りだから勝手な事をしてくれたら困ると思っただけだった。しかし、西洞坂の難所を乗馬の躰もしていないブチを御して見事な手綱捌きで駆け上がった。もしやこの方はお飾りのふりをした本物の武将なのではないかと思った。平六坂では前若年寄の行列と遭遇した時、委細かまわず駕籠を進め、徳川御家門の駕籠を路傍に立てかけさせた。さらに馬籠宿野焼け跡では両親を失った村娘を励まし、殿様の情に心を同じくして皆が懷の食べ物や小銭を与えた。わずか3日のうちに自分は忠義の心を抱いた。口にこそ出さないが80人の供人の胸の内はみな同じだろう。われらが左京大夫様は。紛うかたなき名君にあらせられる⁴²⁾」

すでに『一路』を読み終えた方なら、殿様・蒔坂左京大夫の温かい人柄を示すエピソードをまだまだ挙げる事ができるでしょう。道中で出会った少女スワとの約束を守って彼女のために下諏訪神社に参拝したこと、岩村田の陣屋に内藤志摩守を訪ね、17歳で日光祭礼奉行・奏者番を歴任し、築城を許され、天狗になっている内藤志摩守を諫めたこと、病気中の小諸藩牧野遠江守と本陣差し合いになり、さっさと脇本陣に身を引いたことなど、きりがありません。一路は左京大夫を「噂通りのうつけ者なのか、うつけ者を装った賢君であるのか判然としないが、ただ清らかな水のごとくに無私の人柄で

⁴²⁾ 同上『一路（上）』244～9頁、文庫上 268～73頁。

ある」と評価しています⁴³⁾。この評価に異議はありません。

読者の皆さんから叱責を受けるかも知れませんが、筆者は旗本・蒔坂左京大夫を「名君」と評価するのにためらいがあります。

田名部の地、勘定役の国分七左衛門は国家老の由比帯刀に陣屋に呼び出され、将監一派に与するように強要されます。彼はひとり述懐します。

月の一日にこの広敷に伺い、帳面類を奉呈してお目通しを願う。江戸屋敷にお住まいの年は、在番の勘定方が同様に行く。その際には下段の間に手をつかえたまま多少の説明を加うる習いだが、御殿様からご下問を賜わった憶えはなかった。「月々の務め祝着である」「こまごまはよきにはからえ」そのようなお言葉を頂戴して、儀式は終わる⁴⁴⁾。

著者は「武将たる御殿様は常に神秘でなければならず、家門経営の些事などにかかわってはならなかった。⁴⁵⁾」と書き加えていますが、徳川中期までぐらいならともかく、幕末になってこの殿様像はちょっと違うのではないのでしょうか。七左衛門は、将監が自分の名を売り込むために老中や若年寄の役宅に足繁く通う際の手土産代、商人から巻き上げる金、郡奉行から勝手に横領する年貢の尻拭いを続けています⁴⁶⁾。そうした将監の振る舞いがなければ、七左衛門の苦労もなく、蒔坂家の財政も逼迫することはなかったのです。

左京大夫は父祖の代には四公六民であった年貢が、今や六公四民の苛求になっていることを知っています⁴⁷⁾。財政逼迫の根本原因は将監の乱費にあり、そのことが年貢の誅求に結びついていることに気付くべきです。将監の立場を思いやるあまり、民百姓の苦境に思いを巡らすことを忘れているのです。

物語の終盤、古式に則った参勤行列を愛でられ、彼は将軍家茂から「1万石に加増の上、大名に列する」という上意を得ます。しかし、これを次のように述べて断わります。

⁴³⁾ 同上『一路（下）』159頁、文庫下 179頁。

⁴⁴⁾ 同上『一路（下）』204頁、文庫下 229頁。

⁴⁵⁾ 同上。

⁴⁶⁾ 同上『一路（下）』205頁、文庫下 232頁。

⁴⁷⁾ 同上『一路（上）』141頁、文庫上 156頁。

七千五百石の一所懸命に、一万石は過分にござります。頂戴したところで、差し引き千五百石の領分はこぼれ落つるばかりにござります。・・・(9歳で蒔坂家の跡を襲った時)心細さの中で、左京大夫が幼き胸に誓いましたるは、身の栄達などにござりますものか。いかにして七千五百石に一所懸命たるか、そればかりにござりました⁴⁸⁾。

大いに共感できます。騒動が片付いた後、旗本・蒔坂左京大夫は、国分七左衛門や他の重臣たちと手を携え、領地の財政再建に取り組むべきです。自分ができないのなら、国分を補佐する能吏を徴用すべきです。幕末の長州藩主毛利敬親(1819～71)は「そうせい侯」としてよく知られています。家臣が何を言っても「そうせい」としか言わなかったそうです。そんな殿様でも長州藩が明治維新の担い手になれたのは、彼の下には多数の賢臣・能吏が結集していたからです。蒔坂左京大夫はまだ34歳です。眼前の人々のためだけでなく、西美濃田名部全体の人々のために「一所懸命」に生きてもらいたいものです。時は文久元年(1861)12月、明治維新は間近に迫っています。

青春の煌めき 道中供頭・小野寺一路

無事に御発駕に漕ぎ着け、田名部の地を旅立った蒔坂左京大夫参勤道中一行は小野寺一路の差配の下、中山道を進みます。夜の鵜沼宿、蒔坂将監は左京大夫に言います。「行列が妙に整然としている。・・・まことに息の合った行列に見ゆるのだ。はて、小野寺のほかに誰が差配しているはずもなし。・・・夜道をあんなに急がされても、みな愚痴一つこぼさぬのはふしぎであった⁴⁹⁾」

妻籠宿本陣内庭に面した入側で、その答を佐久間勘十郎が一路と栗山真吾に語ります。

「将監一味の陰謀を知らなかったのはお前たちぐらいのものだ。自分は悪い噂を耳にした時はうろたえた。忠義も糞もあるものか、下手をすれば妻子を抱えて路頭に迷うではないか。皆が沈黙を決め込んだのは自分を守るため

⁴⁸⁾ 同上『一路(下)』318～9頁、文庫下354～5頁。

⁴⁹⁾ 同上『一路(上)』154～5頁、文庫上170頁。

には知らぬ存ぜぬで通すべきだと考えたからだ。田名部衆の胸の内は皆同じだったはずだ。しかし、自分にも正義の心はあった。御家門とはいえ政を私し、御家を乗っ取ろうとするなど許されない悪行だ。その邪惡に立ち向かった者を二人も殺されてもみよ、まかり間違えば次は自分かと恐れるのも人情だ。その二方の倅が道中を差配すると聞いたとき、自分は思い悩んだ。悪い筋書はみえている。劈頭の武者になるように請われたとき、自分は決断した。悪者たちが非を論うことができないくらい立派な道中をして見せよう。一人一人がそんな思いで中山道の 12 日を歩みおせたら、悪人が出る幕はない。何一つ申し合わせたわけではないが、80 人の行列の一人一人が自分と同じ気持ちであることは確かだ⁵⁰⁾」

一路は栗山真吾とともに涙に暮れます。御発駕の準備が整齊と整ったのも、80 人の供揃えが何一つ不平を言わず指図に従ってくれたのも、留守居の家来衆や町衆が土下座をして見送ってくれたのも、八幡社の心を合わせた勝鬨も、そこには噂を知る田名部の侍と領民の祈りが込められていたのです。一路は行列が自分の差配などではなく、田名部の心ある人々の支えによって動いていることに気づきます。そして、帰郷した当初なぜ田名部の人々は自分を疎み、受け入れてくれなかったかも理解できたのです。

一路はとにかく参勤道中の差配を務めるのに懸命です。父を火事で亡くした哀しみや江戸にいて病に苦しむ母への心配は抱えています。とにかく一直線に道中差配の任務に没頭します。別の場面で著者は一路の性格を「物事は全きでなければならぬ。だいたいというのは許せぬ。ひとつ欠ければすべてが壊れると、一路は何事につけても思い込むのである⁵¹⁾。」と記しています。

一路は、与川崩れで捨てた行列荷物を回収して届けてくれた木曾福島關所番頭檜山角兵衛にその完璧主義を宥められます。

「よろしいか。御役目と申すは、及ばざるは罪だが、また一方では分限を過ぎたるも罪と心得なされよ。任された御役目を過不足なく十分にやりおせねばならぬのです。ご一行は相当にくたびれておるはずじゃ。しからば御出立は夜が明けてから、六つ下がりとなされませ⁵²⁾」

⁵⁰⁾ 同上『一路（上）』244～6頁、文庫上 268～70 頁。

⁵¹⁾ 同上『一路（上）』115 頁、文庫上 127 頁。

⁵²⁾ 同上『一路（上）』293 頁、文庫上 322 頁。

これに対して一路は、わずか一刻ぐらいで体が楽になるとも思えないし、それならいくらでも早く下諏訪に着いて湯につかった方がよいと答えます⁵³⁾。それに対する角兵衛の返答はこうです。

「お若いのう。疲れが取れるかどうかではござらぬよ。御一行が供頭たるおぬしに不満を持つか持たざるか、今はそこが肝心でござる。この先、そこもとの差配に御一行が従うかどうかはこの一刻の猶予を与うるか否かにかかっておると申してもよい。策ではござらぬ。結果ばかりを闇雲に求めようとはせず、今少し供揃えの皆々様にご配慮なされよ⁵⁴⁾」

何かの役職に就任されたり、リーダーを務められたりした経験をお持ちの方は思い当たるふしがあるのではないのでしょうか。適度に縛りを緩めることがかえって全体を纏め、ついてきてくれる仲間を増やす大きな力になります。今風に言えば、一路は角兵衛からリーダーシップとは何かを学んだのです。著者は「中山道を無事に歩み切るという使命はおのれひとりのものではなく、供揃え八十人の使命であるという当り前のことを忘れていたのだ⁵⁵⁾」と記しています。

時刻のことを付記すれば、一路はいつも通り七つ（午前4時）立ちをしようと考えていましたが、角兵衛は一刻（2時間）遅らせて六つ（午前6時）下がりに変更するように勧めたわけです。「下がり」とは「過ぎ」というぐらいの意味です。今でも「昼下がり」とか、つかいますよね。

一路は道中で様々な人々に出会います。息子を水の事故で失い孫娘を唯一の生きがいにする太田陣屋の老役人、雪中の和田峠越えを必死で止める下諏訪宿役人、役威を鼻にかけ威張り散らす青年大名、領民を先導して「安中の遠足」を励行する豪快マラソン大名などなど、著者は多様な登場人物を繰り出し、殿様・蒔坂左京大夫の生き様からめて、一路の実直な対応ぶりを描き出していきます。

蒔坂将監一味の陰謀を知った後、一路に参勤道中供頭の役割だけでなく、殿様警護の役割が重くのしかかってきます。安眠するために医師の辻井良軒に眠り薬を所望した殿様に毒味を申し出て、危うく殿様の命を救います。殿

⁵³⁾ 同上。

⁵⁴⁾ 同上。

⁵⁵⁾ 同上。

様の聡明さを知った良軒はこれを機会に将監一味から手を引き、殿様の介護に専念することになります⁵⁶⁾。江戸を前にした大宮氷川神社境内での死闘、一路は殿様の警護に就き、矢島兵助と中村仙蔵の2人が将監の手下2人を斬殺し、殿様は難を逃れました⁵⁷⁾。

しかし、私たちが心惹かれるのは、なんと言っても一路と乙姫との出逢いです。なんと乙姫は超大藩加賀藩藩主前田宰相慶寧の妹です。参勤道中途上の一路と巡り会い、初恋をし、再会を望んでいるのです。なんとか乙姫の望みを叶えようと奮闘する世話役・鶴橋の姿も胸を打つものがあります。一路は分らず屋の佐久間勘十郎を押しつけて乙姫と再会することを承諾します⁵⁸⁾。

星空の下で2人が語り合うシーンは記さないのが花というものでしょう。花嫁修業のために江戸に向かう乙姫、故郷田名部で一路の無事を祈る許嫁の面影を支えに奮闘を続ける一路、一点の曇りもない2人の純白の心が触れ合う逢瀬、2人は二度と会うことはありません。

戸田の渡しで将監一味がひぐらし浅次郎に斬られ、彼らの陰謀は挫かれます。参勤行列一行は無事蒔坂左京大夫の江戸屋敷に到着し、物語は終幕を迎えます。

年の瀬のある日、一路は江戸留守居役・檜山義右衛門に付き添われて老中松平豊前守の役宅を訪れます。そこで一路は豊前守から、参勤を3年に1度、江戸在府期間を100日に改変、江戸に置かれた妻子も帰国勝手とするという参勤交代の改訂が実施される旨を告げられます⁵⁹⁾。一路はうろたえながら、「わが名は、中山道の一路でござりまする。吹雪も寒さも厭いませぬ。どうか、参勤道中をお取りやめになりませぬよう」と訴え、「元和辛酉歳蒔坂左京大夫様行軍録」を豊前守に差し出します⁶⁰⁾。豊前守は冊子を開いたまま、一路の顔に突きつけこう言います。

⁵⁶⁾ 同上『一路（下）』46～54頁、文庫下53～62頁。

⁵⁷⁾ 同上『一路（下）』267～9頁、文庫下298～301頁。

⁵⁸⁾ 同上『一路（下）』183～4頁、文庫下206頁。

⁵⁹⁾ 同上『一路（下）』323～4頁、文庫下361頁。

⁶⁰⁾ 同上『一路（下）』324～5頁、文庫下362頁。

そちの名が中山道の一路であろうものか。命を懸くる道を歩め。一路は人生一路の謂（い）いである⁶¹⁾。

参勤交代は、文久2年（1862）、一橋慶喜・松平慶永らの幕政改革によって、大名は3年に1年、または百日の在府、その妻・嫡子とも在府・在国は自由となります。慶応元年（1865）、再び旧制への復帰が計られ、廃藩置県まで参勤交代を行なう藩も若干みられましたが、ほとんど効果はなく、幕府の倒壊を早めただけの結果に終わりました⁶²⁾。

豊前守が言った通り、一路は「中山道の一路」ではなく、人生の一路を目指すことになるでしょう。殿様の蒨坂左京大夫と同様に、一路も新しい「一所」を見出し、そこで懸命に命を燃やさなければなりません。

臣下の臣下は臣下にあらず

結びに入る前にあと一つ解決しておかなければならない問題が残されています。蒨坂将監をはじめ、その一統を殺さねば解決をみなかった蒨坂家の事件は御家騒動として幕府の処罰の対象にならないかということです。蒨坂家の江戸留守居役・檜山義右衛門は老中松平豊前守の役宅を訪れます。実は檜山義右衛門は松平豊前守の茶の道の師であり、一見隙だらけの呆けた老人にみえながら実は確然たる気構えの闘士でした。「御家騒動だ」と独断する豊前守に義右衛門は反論します。

蒨坂将監が謀叛とその成敗は、天下の御法の定むるところではござりませぬ。家中の悶着を家中にて解決いたしましたことにお咎めを蒙るは、いささか筋違いにござりまする。・・・たとえば、みどもが分を弁えず御老中とここにこうしおりますのは他家の陪臣ゆえにござりまする。ご尊家のご家来衆、もしくは幕府配下の旗本御家人であったなら、かように物言うことなどけっして許されませぬ。こたびの騒動にて落命したるは、ことごとく蒨坂家が家来にござりまする。これを御公辺にて罪と定め、あまつさえ上様のご裁量を仰ぐなど筋違いも甚しゅうございます。・・・無礼と仰せなら、豊前守様はこの儀右衛門を無礼討ちに果た

⁶¹⁾ 同上『一路（下）』326頁、文庫下363頁。

⁶²⁾ 丸山雍成 前掲『参勤交代』253～65頁。

されましようか。それが許されぬは、この老いぼれの命が徳川家やご尊家のものではないゆえにござります。戦陣にて下知を賜うは、わが主のほかはござりませぬ。よってこの命は、蒔坂左京大夫様のものにござります。何が何でも御公边が裁かれると申されるのなら、まずはこの無礼者を成敗なされよ。それができぬ道理がおわかりなら、筋違いのご詮議はお控え下されませ⁶³⁾。

全くの正論です。將軍の耳に入れて裁量を仰ごうと考えていた豊前守は考えを改め、蒔坂家の騒動は不問に付されることになりました。「臣下の臣下は臣下にあらず」なのです。

この「臣下の臣下は臣下にあらず」という決まり文句は旗本・蒔坂左京大夫家に幸いをもたらしました。しかし、側用人の伊東喜惣次にとってこの俚諺は我が身を縛る桎梏以外のなにものでもありませんでした。蒔坂将監の郎党であった喜惣次は将監の推挙で側用人に抜擢されました。蒔坂左京大夫の陪臣から直接の臣下になったにも拘わらず、彼は左京大夫の失脚を謀ろうとする将監の策謀に荷担することを拒めませんでした。彼は将監に脅され、宥めすかされ、蔑まれながら、将監の郎党であったという頸木から我が身を振りほどくことができなかつたのです。将監が斬殺され、悪事が潰えた時、喜惣次は蒔坂家江戸屋敷の土蔵の中で自害します。衣桁に掛けられていた道中着の定紋(家紋)は蒔坂家一統の割菱のままでした。郎党の身分から解放され、直臣の武家身分を得、しかも側用人という重職に就いたにも拘わらず、自家の家紋を人前に翳す確たる自信を持てなかつたのでしょう。

一路は土蔵に向かおうとする左京大夫に「悪事が破れて腹を切った者に御殿様のお心配りなど無用にござります」と言って引き止めます。殿様は一路を激しく叱責し、こう言います。

控えよ、小野寺。参勤道中は行軍なりと申したのはおぬしではないか。戦場に斃れた家来に善悪などあろうものか。亡き叔父上が陪臣として、また左京大夫が家来として、伊東がいかほど苦悩したか考えてもみよ。けっして悪事が破れたのではない。伊東喜惣次はさなる悪人ではない。

⁶³⁾ 前掲『一路(下)』308～9頁、文庫下344～5頁。

忠義大切の武士が、二主に仕えざるを得ぬは不幸ぞ⁶⁴⁾。

7 終わりに

この小説の特徴を言えば、登場する男性の大半が長男であることです。男性の登場人物のほとんどが武士で長男ですから、皆が親の家禄を引き継ぐことになります。彼らの「懸命」に命をかけるべき「一所」は生まれた時から決まっています。彼らが「一所懸命」に生きることが家はもちろん、社会全体から求められているのです。

現代に生きる私たちはそうはいきません。家業や家職を持つ家がないわけではありませんが、今は数も少なく、自家の生業を引き継ぐことは必ずしも強制されていません。ほとんどの人々は兄弟姉妹の別なくどんな「一所」に邁進するか、自分にとっての「一所」とは何かを探し求めなければなりません。現代社会においては、「一生」をかけて「一所」を探し続ける覚悟が必要なのかもしれません。

私たちはどんな家に、どんな親から、どんな顔つき体つきで、どんな能力を持って生まれてくるか、自分で決めることはできません。それは徳川社会に生きる人々も同じです。「運命なのだから仕方がない」と言ってしまうそれまでですが、私たち現代人は江戸時代の人々以上にこの運命の重みを受け止めるのに忍耐と努力が必要なのかもしれません。

小説『一路』の世界に戻れば、やがて数年で徳川時代は終わりを告げ、明治時代が到来します。近代社会のなかで、殿様・蒔坂左京大夫や一路をはじめ、登場するすべての人々がもう一度一から自分にとっての「一所」を探し求めなければなりません。

別れに際して、一路は乙姫にこう語りかけます。

どうかあなた様もおのが定めを正義と信じて、この先の道中をお歩きなされませ。人は皆貧富貴賤にかかわらず、つらい道中に行く旅人にござりますれば、さだめという重き荷を背負うた、おのおのが等しき旅人にござ

⁶⁴⁾ 同上『一路（下）』303頁、文庫下338頁。なお、この「臣下の臣下は臣下にあらず」（陪臣）の問題は本稿4～5頁を併せて参照して下さい。

りますれば．．．．⁶⁵⁾。

—かつや・みちお 尾道市立大学名誉教授—

⁶⁵⁾ 同上『一路（下）』187 頁、文庫下 210 頁。